



米国内務省
のシンボルマーク

USGS メンロパーク —アメリカ西部点描—

三村 弘二(地質部)



米国地質調査所の
シンボルマーク

はじめてのメンロパーク

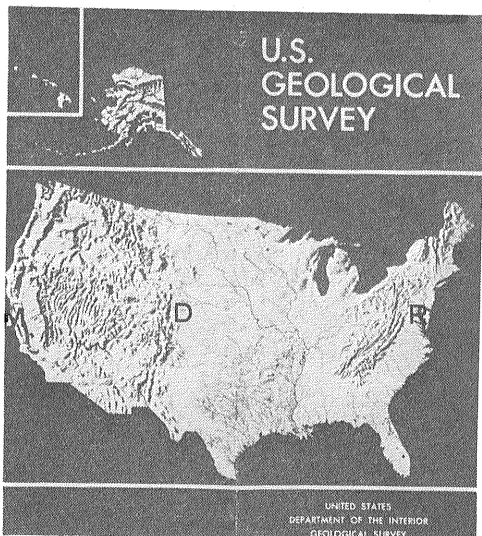
メンロパーク (Menlo Park) (第1図) は サンフランシスコ湾ぞいに サンフランシスコから南方につらなる衛星都市群のなかの 小さな市の名前である。

われわれが移転前の地質調査所本所を溝の口 東京分室を河田町と その所在地でよんだのと同様に 米国地質調査所西部本局 (USGS Western Region Headquarters) は 一般にメンロパーク・オフィス (Menlo Park Office) とか 単にメンロパーク あるいはメンロ などと呼ばれている。日本のわれわれにもむしろこういった呼びかたの方がなじみが深い。

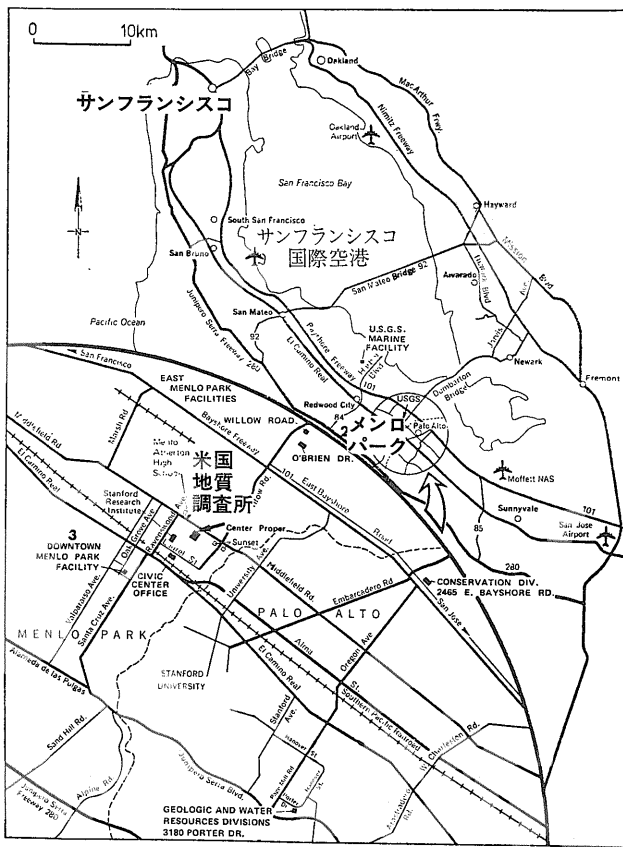
筆者はこのメンロパークという地名を初めて聞いたとき 手近かの小縮尺の米国地図を引っぱりだし 目をサラのようにして探し とうとう見つからなかった 苦い経験がある。

このメンロパーク・オフィスは サンフランシスコの南 10km 程にあるサンフランシスコ国際空港から さらに南へ 26km クルマでフリーウェイ (free way 国内を縦横に走る高速道路網 石油ショック (oil crisis) 以来最高速度は原則として 55マイル/時 (約90km/時) におさえられている。無料) の101号線をとばして およそ30分位の所にある (第2図)。

しかし 都市周辺の交通ラッシュ (traffic jam) は日本と御同様で とりわけ通勤時間帯にはこの所要時間はあまりアテにはならない。クルマが生活の手足といってもよい国で クルマなし となると格段に不便となるのは空港からここまでも例外ではない。無論時間に余裕があって 乗り継ぎや乗降地点までのかなりの散策を楽しみたいのであれば バスや列車 リムジンがあり お金に余裕があれば タクシー (Yellow Cab) もある。しかしこれらは突然 旅行者にとってはまさに突然 ときとして長期のストに入っていることがあり あまりニュースダネにもならないことがあるので注意を要する。手軽な空港のレンタカー (rental car) を利用するか できれば 友人知人に頼んで運んでもらうのが 一番であ



第1図 米国本土と米国地質調査所 (USGS) 3本局の位置 (USGS のパンフレットから) M: 西部本局 メンロパーク D: 中部本局 デンバー R: ナショナルセンターおよび東部本局 レストン



第2図 USGS 西部本局 (メンロパーク・オフィス) の位置図

る。

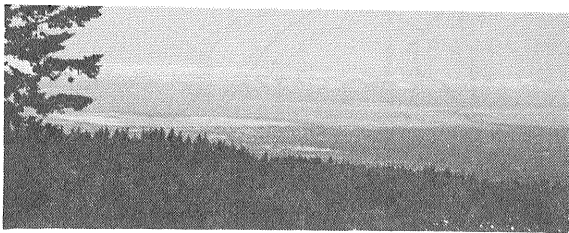
初めて筆者がメンロパークを訪れたのは 空港にUSGSの友人マフラー氏 (Dr. L.J. Patric MUFFLER)一家の出迎えをうけて 米国西部への第一歩を記した直後であった。日本ではおよそ小回りのききそうもない 彼の大きなステーション・ワゴンに 私の荷物を双方の家族ともども楽々と乗せてもらい 101 号線を南下した。午前9時すぎ まっ青な空の下に よこに広い街並みと 横文字ばかりが目映る。つい先刻空港の入国管理官が青い目で巧みに操っていた日本語にかわって マフラー氏の気嫌のいい米語が 上気した当方の耳の底をたたいている。やがて道路の左方 湾沿いと思われるあたりに 白い小丘がみえた。「あれは？」 筆者の問いに「シオさ！」とこともない返事がかえってきた。野積みの塩の山？「塩田」であることを知ったのはその後である(第3図)。羽田をたつて9時間半ついにきてしまったという実感がようやくわいてきた。「ここが われわれのオフィスだよ」といわれて そうかと見回した USGSは 日曜日1976年3月21日 カラリとしたカリフォルニアの日ざしのもとで深閑と静まりかえっていた。

よこに広いオフィス群

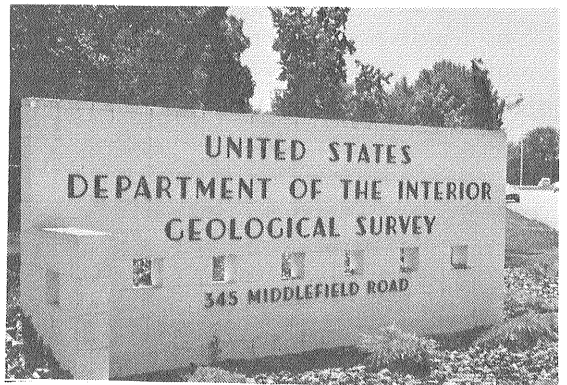
第2図のミドルフィールド道路 (Middlefield Road) 沿いにあるメンロパーク・オフィスは 日本のわれわれの感覚からすれば その名の通りちよつとした公園 (park)の中にある というのはいいすぎであろうか。それもチリひとつなく 手入れのゆきとどいた公園である。

正門(第4図)を入ると 正面はるかに花壇に囲まれたメインホール(第5図)が見通せ 道路をはさんで左右には一面の芝生が広がる(第6図)。その奥に庁舎がある(第7図)。常時作業の人々が草木にハサミを入れ 芝をかり 時間がくれば タイムコントロールの散水器 (sprinkler) が一斉に芝生に水を与える(第6図)。駐車場は外側からみて目立たない庁舎のかげに配置されている(第8図)が 最近では7号・8号館のようにそうもいってられなくなってきたらしい(第9図)。

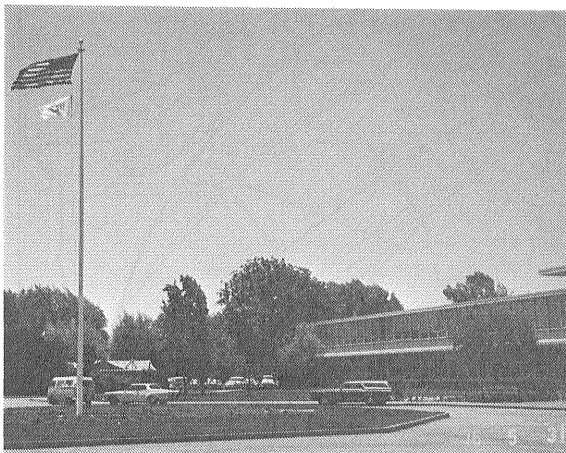
この‘メンロ公園’内の建物はひとつではない。600 m×300m 程の敷地内に分散したオフィス群から成り立っており 第10図のような案内板があちこちに立っている。主な建物は番号をつけて呼ばれているが 現在の配置は次のようになっている。



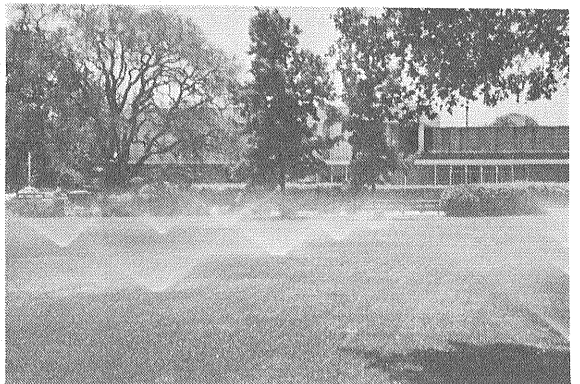
第3図 メンロパーク南の丘陵からサンフランシスコ湾を望む 湾の手前に白く見えるのが塩田



第4図 メンロパーク・オフィス正門 この右側に道路をはさんで同様の看板に「USGS Western Region Headquarters」の文字がある



第5図 連日星条旗のひるがえるメインホール 星条旗の下には建国200年を祝うシンボルマークの小旗がみえる 右は測地総部の3号館庁舎

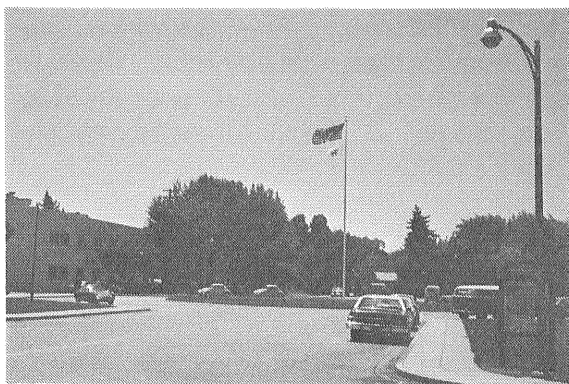


第6図 正門わきの広々とした散水中の芝生 木立の向うは3号館

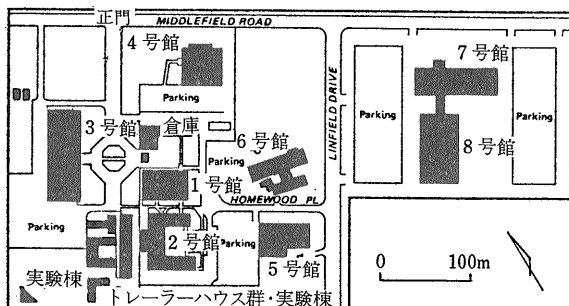
- 1号館 (Building 1)—主に管理総部(Administrative Division) USGS に関する情報案内窓口をふくむ
- 2号館 (Building 2)—地質総部 (Geologic Division)
- 3号館 (Building 3)—測地総部 (Topographic Division) 地形図の販売・情報カウンター常設
- 4号館 (Building 4)—西部本局および地質総部副長室 (Assistant Director, Western Region and Geologic Division)
- 5号館 (Building 5)—図書館 (Library)
- 6号館 (Building 6)—出版総部 (Publications Division) 水資源総部 (Water Resources Division) の一部
- 7号館 (Building 7)—計算センター (Computer Center Division) 地質総部のうち海洋地質部および環境地質部 (Office of Marine Geology and Environmental Geology) の一部
- 8号館 (Building 8)—地質総部地震研究部 (Office of Earthquake Studies)

部局の訳名は 小野晃司：地調月報 24 1973 および盛谷智之：地質ニュース 246 1975に従った。

以上の建物を中心とした配置を 第9図に示す。「なにぶん メンロは手狭でネ」というのが USGS 職員のきまり文句ではあったが ごらんとおり その言葉の感覚は われわれのそれとは 明らかに次元が異なっている。なるほど奥の方には 実験室用のトレーラーハ



第7図 メインポール後方は管理総部の1号館



第9図 庁舎配置図

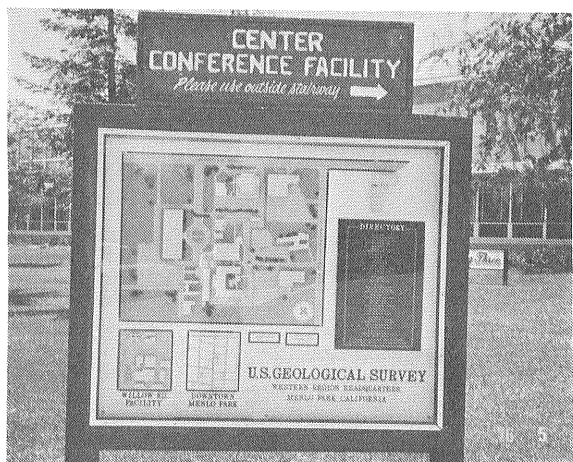
ウス (第11図) がビッシリと並んだ一画もあるが それでも敷地全体に占める建面積は ざっとみて15%以下ではなかろうか。

しかも これらの建物はすべて平屋か せいぜい2階建てどまりで レストン新庁舎の高層ビルとは対照的にやけに横に広い。平べったい建物が 散在する敷地内は ますます平べったく 星条旗はためくポールのみが目立って高い存在である (第12図)。したがって どこも日照はすこぶる良い。しかし 狭いといいながら われわれからみれば ぜいたくとも 無駄ともいえるような土地利用は 研究を仕事とする官庁の当然の智慧なのかもしれない。この広い芝生と樹木におおわれた敷地のお陰で いまでは街の真っ只中になってしまった研究所全体が依然としてその機能に不可欠な自然の空間を保持しえているからである。

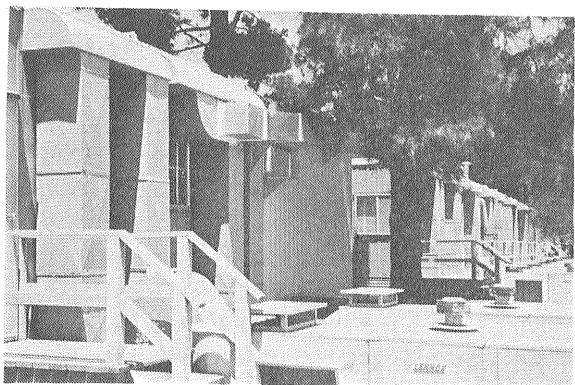
第9図をもう一度みて頂けば USGSが最近入手した東部の7号・8号館を除き 建物の配置の重心が 図の中央より下半分におかれているのに気づかれよう。図



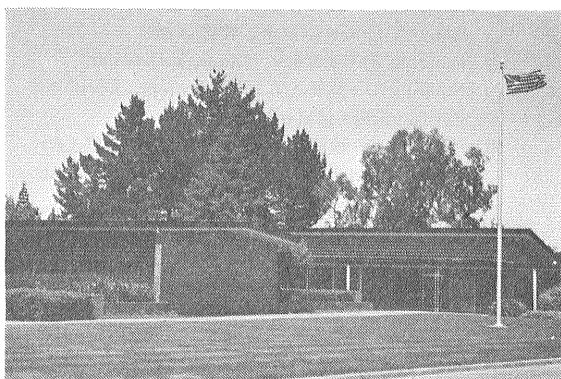
第8図 地質総部の2号館とその背後の駐車場



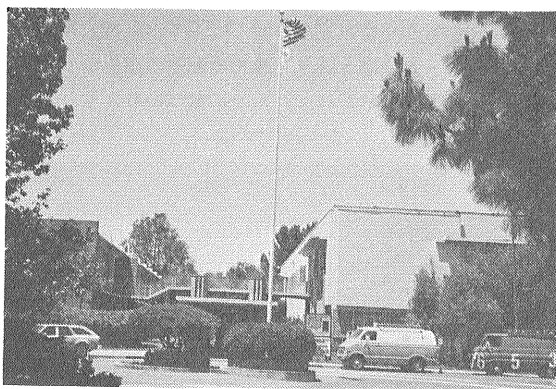
第10図 敷地内に立つ庁舎案内版



第11図 トレーラーハウス群 主に実験棟が集中している



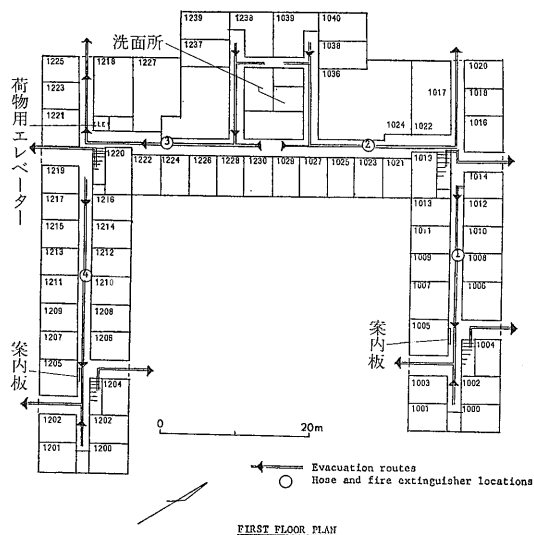
第12図 横に広い庁舎(6号館)とポール



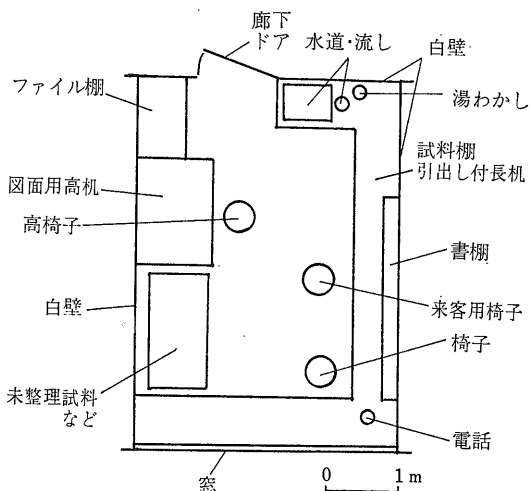
第13図 1号館(右)と2号館(左)

上辺の左右にはしる道路 (Middlefield Road) はけっこう交通量の多い一般道路である。中央右よりを縦にはしる道 (Linfield Drive) は下方の住宅地に通じていてクルマの量は格段に少ない。

このため 騒音は事務部門の1号館周辺でももちろんさらに奥の研究部門の2号館では 小鳥の鳴き声がむしろ気になる静けさである (第13図)。排気ガスや工場の異臭とも無縁。静かな環境は小動物にも快適らしく樹木の間をリスが走る。友達になると 人の手からパンくずを失敬する 人なつこい小鳥もくる。芝生や木陰の所々には木製のベンチやテーブルが配置され 昼食時には芝生と共に職員の弁当をひろげる所ともなり いこいの場ともなる。またしばしば 研究や業務の討論の場ともなれば ひとり思索にふける研究官の姿をみかけることもある。



第14図 庁舎内配置図の例 2号館1階



第15図 研究室見取図(標準1人用の一例 2号館)
白壁には進行プロジェクトの地質図など大型図面が張られる。

一人一部屋の研究室

研究官の部屋は けっして広くはない。地質総部の2号館を例にとると 第14図のように ハーモニカ方式で細長い部屋がいくつも並んでいる。各小部屋はおよそ奥行き5m 幅が3.5m程度であろうか。注目すべきはアシスタントなどを除き少なくとも一人前の研究官には これらの小部屋1部屋に1人が原則として配分されていることである。秘書の場合は1部屋に2名。これより広い部屋には 例えばプロジェクトのグループ長と秘書達などが入る。

地熱グループ長 (Co-ordinator, Geothermal Research Program) のクリチャンセン氏 (Dr. Robert L. CHRISTIANSEN) の場合は 一般の研究官と同様の小部屋で となりの秘書達の小部屋とは内部ドアで連絡していた。研究官として あるいはグループ長として 思索が必要なときは 間のドアを閉じさえすれば OK で 秘書達が緊急の連絡をする場合は インターフォン兼用の電話を使用する。少なくとも 思考中に 用の緩急を問わず 他人がずかずかと立ち入ってきて 断えず思考が中断されることへの歯止めだけは 保障されている。

このことは独立した各小部屋の研究室では より確かなものとなる。部屋を共有することで 研究中には有害でこそあれ全く無用な 他人のおしゃべりや 電話の取りつき 煙害に悩まされることはまずない。小部屋にかかる電話や 訪れる人々は すべてその研究官自身に用のあるものであり 研究官それぞれの責任で処理されるべきものである。ただし 間じきりはそう厚くはないので 大声では無論つめぬけだが 幸い日本のわれわれの周辺によくみかけるような 声高におしゃべりするものはよほど少ないのか ほとんどとなりの会話や物音は気にならない。

面白いことには ろうかに面したこれら各研究官の小部屋のドアは とくに必要なとき以外は 通常開け放しになっている。これはいわずもがなに 自分が出動してきていることと 用のある者の入室を拒まないサインともなる。実際 ろうかを歩いていても 相手の姿をみかけて 気軽に話しかけることができ しかも他の研究官の注意をそらすことはない。つまり ドアの開閉ひとつで 研究官は必要に応じて 研究空間を閉じたり開けたりでき 個室であることによって 研究討論の場がそこなわれることは少しもないのである。

各室(第15図)には横に長い引出し付きの机とイス タイプ一式 電話 書棚 図表類を広げるための地図棚兼用で腰の高い作業机 簡単な薬品も扱える蛇口のついた

流し それに來客用のイスが標準設備され さらに地質の研究官の部屋には 双眼の偏光顕微鏡1基と岩石試料整理棚少々とがそろっている。横長の机に底の浅い引出しの数が多いのには ちょっとびっくりさせられるがなれてくると整理ケースとしてまことに重宝である。

研究室の一人一部屋は わが国でも大学の助教授・講師クラス以上では標準と大きく。同じ地質調査所でありながら 世界がちがうといつてしまえば それまでかもしれないが 同じ研究者としてうらやましいことである。その発想が日本に定着するのはいつのことであろうか。

個々の実験室は 筆者とは直接関係がなかったうえ 部局により専門によりさまざまで ここでいちがいにのべることはできないが 次のような傾向はあるらしい。

ひとつは 年々手狭になる既存の庁舎からはみだしてしまい 第9図の9などにみられるような トレーラーハウス群(第11図)でなんとか処理しようとしているらしい。がここにも建物に入りきれなくなった研究官達の居室が 割りこみつつある。さらに居室は 管理部門の1号館 図書館の5号館にも 進出しつつあり この方の事態ははたでみる程楽ではないらしい。いまひとつは 未確認情報だが 共用の実験室があるにはあるが管理が難しいのか 荒れがちで 結局いつでも使用に耐えうる状態には保ちにくいとのこと。これも部局によって事情はおおいに違うであろうが 筆者のいた地質総部では 研究官が 結局狭いのをがまんして自分の居室に実験器具をもちこんでしまっているのを見かけた。

筑波移転後のわれわれにとっても 共用実験室の運用は 心すべきことのひとつと思われる。

拡張と集中化は依然頭痛のタネ

USGS の総本局 (National Center) は バージニア州レストンに 1973年新庁舎が完成し 念願の総合移転が実現したが ここメンロパークでも 庁舎の集中化と敷地の拡張の努力が息長く重ねられてきたようである。急速に市街化の進みつつあるサンフランシスコ周辺にあって その努力はますます著しく困難に直面しているであろうことは想像にかたくない。

筆者滞在中の1976年夏に ようやく東隣のシェル石油会社の土地を建物ぐるみ買収することに成功した結果 格段に拡張集中化がすすみ まだ2 3カ所市内に分散している所もあるものの 現在は 前に述べた 600m×300m ほどの敷地内に 大部分がおさまっている。買収した建物(7号 8号館)(第9図)は今でもシェルビルディング (Shell Building) と呼ばれているが これが USGS のものとなり 拡張を前にしたときのメンロパークは いささか興奮した嬉しさが 訪問者である筆者にも

伝わってくるようであった。

このとき下町のオフィスからようやく移転してきた地震研究部などは たまたま勤務しておられた安藤雅孝さんの言によれば それこそ ‘穴倉のような生活’ からいっきよに日の当る研究環境へ ぬけだしてきたような気持だったらしい。

しかし それでも依然として研究を機能とする庁舎がホウワウ状態にあり より多くの空間を必要としていることは すでにふれたとおりである。 「どうして上へのびないか(高層化はしないのか)」との筆者の問いに 「おいおい ここは地震の名所だぜ」と地質仲間の友人の冗談とも本気ともつかない答えが返ってきた。 彼によれば 1906年のサンフランシスコ大地震程度の地震がきたら 今の2階建ての庁舎でさえひとたまりもなく 「まず1階はなくなって 2階が1階になることは間違いない」と説き 今年でちょうど70年目だ と肩をすくめてみせた。

この公園のようなメンロパークにも 将来への悩みはあったのである。

フレキシブルな勤務時間

筆者の滞在中 USGSでは従来の週休2日制に加えて研究意欲と能率を向上させる観点から フレキシertime (flexible time) が導入された。 これは出勤・退出の時間に各々2時間の幅をもたせ その範囲内で自由に出勤し 8時間働いたら帰るというシステムである。 仕事の性質上どうしても時間に不規則になりがちな研究官には勿論のこと 事務官にもすこぶる好評である。 タイムレコーダー (time clock) はない。 したがってこのようなシステムは チームワークなり お互いの信頼関係 職員各自の自覚などがなくては不可能であろう。

メンロパークでは 総じて職員の出勤は早い。 筆者など標準のつもりで午前8時半に顔をだして すでに大部分の人々がフル回転に入っていて うろたえた覚えがある。 そのかわり めいっばい働いたあとの退出も早く これも見事なものである。 サマータイム (Day light saving) の期間は まだ日が高いのに庁舎はガランとしてしまい 見回りのガードマンと掃除の人達の姿ばかり目立つことになる。 逆に同じサマータイムでも春や秋には まだうす暗いうちから出勤する。 もちろん研究官によっては 夕飯後再び出勤したり 残って仕事をする場合もある。 しかし 家庭を大切にする風潮が強い国柄であってみれば そのような人達は家庭的には不幸なのかもしれない。

ノーネクタイ

アメリカの西と東ではかなり異なるものがあるといわれるが ファッションもそのひとつであろう。 フォーマルな東から西へ漸次ラフになり 西海岸に至っては ついに着物すらつけなくなる。 そこまではいかなくとも 娘さんがハダシでピタピタ街を歩いていてもとくに どうということがないのが西部 ことにカリフォルニアである。

USGS職員の服装も こういった状況を反映して レストンとメンロパークとではずいぶんちがうものだと驚かされる。 ユニホームなどは無論どちらにもないが ネクタイ姿の目立つレストンしか知らない人がメンロへ着いたとしたら GS の職員はどこにいるのかと探してしまいかもしれない。 よくいえば個性的 わるくいえば テンデンパラバラの服装がゆきかい あまつさえヒゲモジャ姿もごく当り前で とうの昔に省エネルギーのノーネクタイである。 むしろ変らないのは 男性職員よりもともとカラフルな女性職員の服装の方かもしれない。

USGS からほど近いスタンフォード大学 (Stanford University) へ留学してきた日本のさる大学の教官が受け入れ先の教授に初日にいわれたことは 「おさしつかえなくば 明日からそのネクタイだけはとってきて頂けませんでしょうか」 だったそうである。

外に開かれたオフィス

USGSにはお客さんが多い。 一般の人々に最もポピュラーな窓口のひとつは いうまでもなく 地形図を一手に扱っている測地総部の販売カウンターであろう。 同じ建物の中で図化作製される種々の地形図がすべてここで直接閲覧でき 購入することができる。 広いカウンターごしに 愛想よく応対してくれる職員をとうして 地形図に関する最新の情報も得られる。 なにぶん広い国土のこととて そのすべてが同じ規格で図化しおわっているわけではない。 州別の出版図索引と凡例は無料。 他にこれも無料で現在図化が進行中 あるいは図化が終了した地域の索引図もあり かつてのわが地質調査所の地質図目録図と似ていなくもない。 他に航空写真 衛星写真のサービスもうけられ 文字通りお客は引きもきらない。

「ミドリですか? それともミドリぬぎですか?」 縮尺・地域が決った所で注文するときまってこう聞かれる。 緑色のトーンで植生の有無を示してある地図となない地図の2種類があり この点は砂漠地帯をかかえるお国柄ならではのである。

同じGSの職員は伝票をきっていつでも必要な地図を利用でき 日本の国土地理院が同じ庁舎に入っているよ

うなもので まことに便利である。

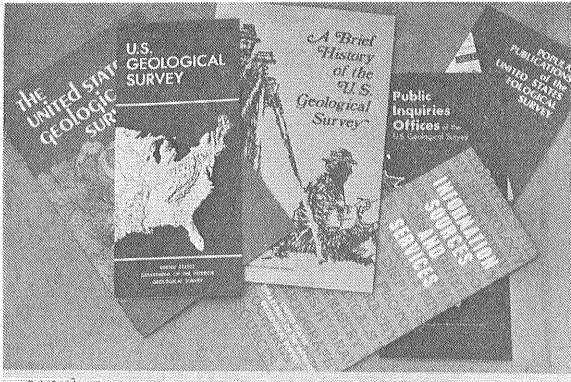
USGSの図書館の自慢は少なくとも2つある。地質ニュース No. 298 で盛谷智之氏が紹介しているようにひとつはその豊富な資料と設備 それに人員で ここメンロパークでも その基本にかわりはない。いまひとつは 職員のみならず一般市民にも自由に開放されていることである。メンロでは第16図のように建物自体が独立しているが その入口には閲覧案内の受付があり 常に何人かの館員がいて 外来者に図書に関することは何でも実に親切に教えてくれる。コピーのサービスもあり 必要とあらばカラーのコピーも可能だが この方は1枚約400円(\$1.8)となかなか高価である。

サービス精神といえば ある日 珍しく大人に混って小さな坊やの姿をみかけた。日本の小学校で4・5年といった所であろうか。熱心に図鑑を調べていた。オヤツと思ったのはその翌日図書館のトイレに入ったときである。きのうまでの便器がひとつりはずされ工事中であった。故障かなと思っていると それから2・3日して そこにはちゃんと新しく子供用の設備がされていたのである。



第16図 静かなたたずまいのUSGS図書館

1号館の管理総部に入ると 受付の前に何十種類というパンフレットが並べられた棚がある。すべてUSGSが一般向けに作成したもので来訪者は興味のあるものはどれでも取ることができるになっている。これら小冊子の内容は USGS と地球科学の紹介 トピックなどで 実にさまざまな種類がある。筆者が採集した



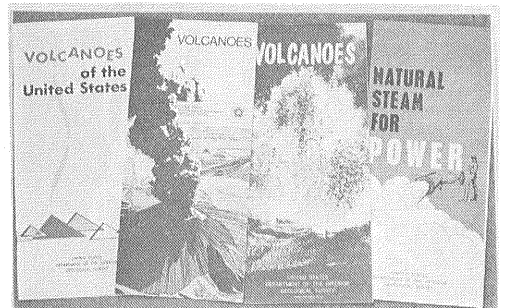
第17図 USGSの紹介パンフレット



第18図 地形図および地質図に関する案内書



第19図 USGS図書館の紹介および案内書



第20図 火山と地熱に関するパンフレット

だけでも70種類以上は用意されており その一部を第17—20図に示す。 USGS が総力をあげている研究の成果を こうした形でも わかり易く簡潔に 社会へ還元しようとする姿勢には なみなみならぬものを感じる。

小冊子だけでは満足しない訪問者あるいは今少しつっこんだ情報のほしい人には それなりに応対する専門官いわばスポークスマンがいる。 筆者の知っているカストロ夫人 (Mrs. C. S. Castro) もその一人であった。「やはり サンアンドレアス断層 (San Andreas Faults) についての質問が一番多いようネ」と彼女の部屋の前に張られたその断層を示す大きな地図をみながら ときに学校の生徒までを含むお客の質問を手ぎわよく処理していたものである。

建物のなかを歩くと 管理部門 研究部門を問わず 部屋の入り口付近によく 進行中のプロジェクトの地図や図などが大きくはりだされていることがある。 これならばいつ訪問者があっても説明できるし ただ張ってあってもその部屋の住人が大体どんなことをしているのかの見当はつく。 いよいよ興味がのつてきた方は研究室のなかへどうぞ というわけである。

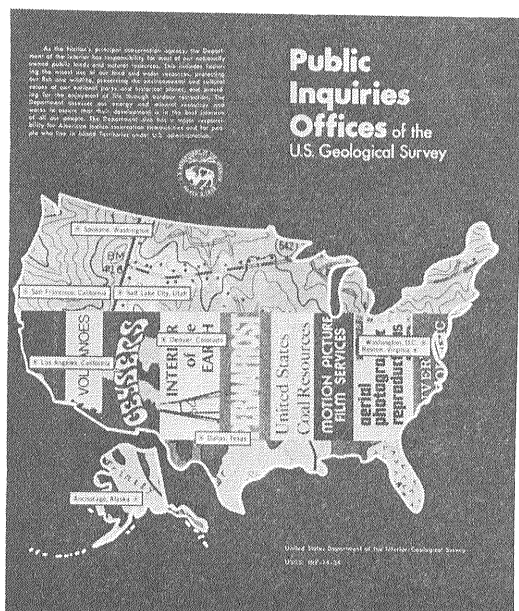
USGS の出版物の販売 案内には 国立公園のビジター・センター (visitor center) や特約店の他に 別に専属の販売センター (Public Inquiries Office) を全国 (第21図) に設けて力を入れている。 ここでは地形図も含めて 総てのUSGS出版物が安価で購入できる。 サービス精神はなかなか旺盛で リクエストに応じて 月刊のUSGS

出版案内(New Publications of the Geological Survey)(第22図) から その分厚い1年版も送ってくれる。 両方とも無料で 送料はとらない。

競争の世界

メンロパーク・オフィスに働く人の数は約2,000人と一口にいわれているが 友人のマリス氏 (Mr. Robert R. MALLIS) の話では USGS 全部で9,000人をこえる総員のうち 正職員 (permanent officer) はせいぜい4,000人ほどというから こども同様なのであろう。 筆者のフィールドを一緒に手伝ってくれた学生は 実は臨時職員で夏の間だけ USGS で働き そのお金を博士号 (Ph. D) をとるための学資にしているという。 Ph. D をとったらぜひ正式の USGS 職員になりたいと彼は真剣だった。 正職員になるための競争はなかなか激しいようだ。 Ph. D をとって補欠人名簿 (waiting list) にのつたとかまだまだとかいった話もきく。 そういえば 筆者のめぐりあった USGS の新人は 誰もが Ph. D をとっていた。 USGS はとうに Ph. D 時代に入っているらしい。

大世帯の運営は いわゆる部課制によるタテの線と研究プロジェクト・グループによるヨコの線との2本立てで行われている。 各部課長 (例えば section chief) は各々独自の いわば運営予算をもっているが 個々の研究官としては 研究プロジェクト毎に配分される研究費



第21図 USGS 販売センター案内の表紙

New Publications of the Geological Survey

UNITED STATES DEPARTMENT OF THE INTERIOR

List 841—Publications issued in August 1978



U.S. DEPARTMENT OF THE INTERIOR
GEOLOGICAL SURVEY
329 NATIONAL CENTER
RESTON, VA 22092
OFFICIAL BUSINESS

POSTAGE AND FEES PAID
U.S. DEPARTMENT OF THE INTERIOR
INT 613



Third-Class

第22図 月刊のUSGS出版案内(A.5版)

が主なものである。どのプロジェクトに属するかは研究官の自主性に委ねられている。予算時期になるとグループ長(例えば co-ordinator)のオフィスには予算の申請をする各研究官からの分厚い書類がところ狭しと並べられることになる。ここで成果のでていない担当官の予算は いともアッサリ(?)と削られる運命にある。

研究の評価は部課長の線からも行われる。というのも年1回もちまわりの評議員会で推薦されて初めて職員の昇格がきまるが この会への候補推薦は部課長の手によるからである。昇格が認められないと たちまち昇給は頭うちとなる。USGSの給与体系は 例えば研究官の場合 Ph. D をとって入ったものが まず G. S. (General Service の略)の11か12等級。トップの所長が18等級で その間に6ないし7つの等級がある。一方各等級のグレード(いわば号俸)は極めて少なく 昇格がなければ 3年かせいぜい5年どまりで昇給はストップすることとなる。認定の基準は「ベストとは思えないが やはり論文の数が一番 本当は質が大切のだが」旅先で話してくれた友人はちょっと困った顔になった。やはりここでも難しいことにはちがいなさそうである。

それにしても評議員会と部課長の権限は強大だね といいかける筆者の先をとって 友人達は笑って「濫用は

できないサ 自分にまわってくるもの」なるほど そういえば USGS では部課長はすべてローテーションである年限務めると 再びヒラの研究官にもどれるシステムであったことを思い出した。これはグループ長も同じである。評議員会の方も似たようなもので とにかくメンバーの固定はないらしい。つまり結局のところは個人の責任を明確にした上での研究職員相互の研究能力評価なのだ。なまけものにとってはまことにいろいろな環境といえよう。なお1昨年10月カーター大統領の「連邦公務員制度改革法」が成立をみたことで事務官をも含めた能力本位の人事管理は USGS でも格段に強まる気配である。

ランチでセミナー

地質総部を例にとると 研究セミナーは活発で 2週間単位ぐらいで 第23図のような予定一覧表が 庁舎の掲示板等に張り出される。これをみると総部のどこで何が行われているかが一目でわかり大変に便利である。

個々のセミナーの主催は 部課であったり 研究グループであったり 外部からのお客さんを迎えたホストであったりするが 無論参加は全く自由である。セミナーのいくつかは曜日が定まっておる なるべくお互いが

USGS GEOLOGIC DIVISION SCHEDULE OF EVENTS* - JANUARY -

MON 17	TUES 18	WED 19	THURS 21	FRI 22
9:00-11:00 LIB CONF RM 2:00-4:00 <u>C. KENT CHAMBERLAIN</u> University of Nevada Short course on Trace Fossils (Field trip Tues.)	11:45 LIB CONF ROOM <u>WENDELL DUFFIELD</u> "Summary of DSDP Leg 49 -Drilling along the Mid-Atlantic Ridge" 12:00 MUDDERS MUNCH See Announcement 8:00 P.M. PICK & HAMMER MEETING See Announcement		3:15 EQ CONF ROOM * NCER Seminar * <u>TOM HANKS</u> "Earthquake Stress Drops, Ambient Tec- tonic Stress, and Stress that Drive Plate Motions"	11:45 LIB CONF ROOM <u>MAX PITCHER</u> Continental Oil Co. "The Technological Fore- front of Petroleum Exploration" 2:30 LIB CONF ROOM * Geophysics Seminar * <u>DON PIQUEE</u> "Gravity & Magnetic Expres- sion of Calderas NW Nevada"
MON 24	TUES 25	WED 26	THURS 27	FRI 28
12:00 LIB CONF ROOM * Geothermal Seminar * <u>JOHN SASS</u> "Heat Flow in Northern Nevada--Some Implica- tions of New Data"	12:00 MUDDERS MUNCH Hiller Conference Room <u>MIKE HARLOW</u> & <u>AL COOPER</u> A discussion of geo- physical anomalies of the Bering Sea		3:15 EQ CONF ROOM * NCER SEMINAR * <u>BILL STUART</u> "A Strain Softening Model for Earthquake Precursors"	2:30 LIB CONF ROOM * Geophysics SEMINAR * <u>ROBERT JACHENS</u> "Variation of Gravity in Guatemala and Hawaii"

* PUBLISHED BI-WEEKLY. FOR ADDITIONAL COPIES & ADDITIONS TO CALENDAR, PHONE REGIONAL GEOLOGIST'S OFFICE, 2214.
 NOTE: THIS CALENDAR IS NOT TO BE DISTRIBUTED TO THE PUBLIC WITHOUT THE CONSENT OF THE OFFICE OF THE REGIONAL GEOLOGIST.

ダブらないような配慮もされている。予定日が近づくと各セミナー担当者はそれぞれにユニークなデザインのポスター(第24図)をあちこちに張りめぐらして積極的な宣伝に努める。ことに利用されるのは各庁舎の出入り口のガラスドアである。ここならいやでも人の目につく。ただしセミナーが終るとこれらのポスターは実に素早く撤去され 用もない紙がいつまでもブラブラしている見苦しさはない。面白いのはその時間で ちょうど昼の時間に重なるものが少なくない。ふだんはそれぞれの研究に忙しいのだし 人の話を聞いてもらうのに わざわざ貴重な勤務時間を奪うのは申しわけない といった発想ともうけとれる。ともかく筆者はその精神に感激して空腹をガマンして出席したところなんのことはない各自ランチをかかえてきて ムシャムシャバリバリ。食べながら話をきき議論する。何も食べないで熱心に話す講師の手前もあって どうもうまく食事がノドを通らないで困ったのは筆者位のものらしい。

学問の話をするのに時と所を選ばないという精神なのか 講師もビールなど軽い飲み物を聴衆と共に楽しみながら というセミナーもあって これはヨル8時から。

USGSのシンボルでもあるピックアンドハンマーの名のついたセミナー(Pick and Hammer) (第25図)である。公民館のような所を借りて 紀行談あり 骨のある話ありだが 適度のアルコールも手伝ってごつくばらんな雰囲気第一線の研究者の話が楽しめる。飛び入り参加歓迎で誰をつれてきてもかまわない。

やや話ははずれるが情報交換の場としてはセミナーのほか 各部局毎の内部サーキュラーもいくつかある。地質総部では 月刊誌「The Cross Section」(B5版30頁程度) (第26図)があつて 部内の動きを伝えている。新任者の横顔や人事 それに各部課の研究速報等がのつていて便利である。部局によっては 所属する職員の学術誌投稿速報をのせているところもあった。

USGS 西部本局からは「Western Regionnaire」(第27図) USGSの属する内務省(Department of the Interior)からは「Inside Interior」(第27図)など いずれも職員に配布されている。その他に必要な情報は事務的なものを含めて 随時実にこまめに各職員の中央通信受け(mail box)に文書で配られてくる(第28図)。このため連絡のための会議は省略され 研究者が会議そのものに貴重な時間をさくことは少ない。

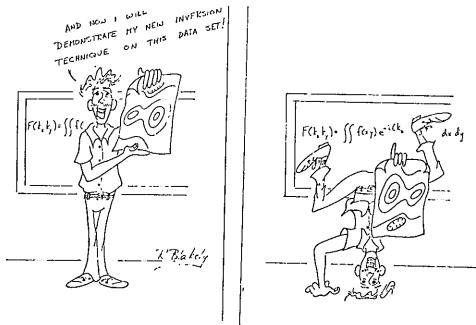
REGIONAL GEOPHYSICS BRANCH

SEMINAR

INVERSE METHODS APPLIED TO THE MAGNETIC ANOMALY OVER MOUNT SHASTA

by

RICK BLAKELY, U.S.G.S.



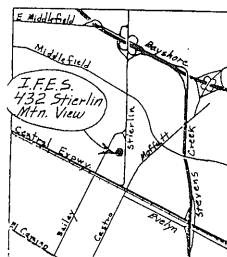
2:30 PM, FRIDAY, DECEMBER 3
LIBRARY CONFERENCE ROOM, USGS

第24図 セミナー案内ビラのひとつ この部課の案内ビラは常にユーモアたっぷりであった(A4版)

ORE DEPOSITS [The season's last session] *lots of fun*
PICK AND HAMMER PRESENTS:

Talks on weirdos, conflicts, and other highly Volatile subjects

- Gary Byerly (Smithsonian Inst.) - Soda rhyolites and other weird rocks, Galapagos spreading center
- Art Radke - Ireland: Southern ores and northern action (Brits out!)
- Jim Moore - Volatilized dry ice in sea-floor basalt



Tues, May 17
8:00 p.m.

IFES Small Hall
432 Stierlin Rd
Mountain View

Come as you are and bring a friend

第25図 ピックアンドハンマーのセミナー案内(A4版)

有能な秘書達

USGSの一般事務関係の人達もそうだが 各部課あるいはグループ毎に配置されている秘書達 (secretaries) の活躍はめざましい。年齢はさまざまでかなり年配の御婦人も多いが 若いお嬢さんが目立つ。勤務時間中クルクルとよく働き とかく研究者を悩ましがちないわゆる雑用をテキパキと処理してくれる。おかげで研究官が本来の職務である研究に少しでも専念できる意味で その功績は実に大きいといわねばならない。秘書は部課長クラスに2-3人 グループ長に1人 長老格の研究官(いわば部付の主任研究官?) に1人といたる案配で 他の各研究官はこれらの秘書をいわば共有する形になる。タイプはもちろん 郵便物の出し入れ 出張の手配 事務連絡 計算 コピー 文具の購入から地形図の受領 書類つくり一切 少しオーバーな言い方をさせてもらえば いたれりつくせりである。おかげでなれない筆者もどれだけ助かったかしのれない。但し お茶くみなどのサービスはしない。アメリカでは職務分担が実にはっきりしていることが多いが 彼女達は秘書として USGS の研究機能を支援する まさにプロといったよいであろう。

働きものの秘書嬢達は 研究官からすこぶる大切にされている。結婚ともなると研究官総出で祝福するといったことも珍しくないようである。筆者が世話になった人気者で日系3世の Mrs. J. Chu の祝賀宴のにぎやかさは 当時の語り草になっていた。

おことわり

以上かけ足ではあるが 筆者が科学技術庁長期在外研究員としての1か年と USGS客員研究員として7か月半余りの研究の合い間に見聞した範囲で USGSメンロ



U.S.G.S. Director Vincent E. McKelvey

will address all Survey employees on

**Thursday, February 3
at 11:30A.M.**

Steps of building III



第26図(上) 地質総部の部内月刊誌「The Cross Section」(B5版)

第27図(下) USGS西部本局機関誌(左)と内務省速報(右)(ともにB5版)

パークの片リンを紹介させて頂いた。いく分でも雰囲気なりをお伝えできたのであれば幸いである。収集した情報に片寄りがあるのは御勘弁頂くとし もし誤りがあればそれは筆者の責任である。

なお ここではとくにふれなかったが USGSの歴史機構 予算 地質図をふくむ出版物などについては 既にこの地質ニュースの No. 18 (佐藤 1955) 以来 No. 125 (林 1965) No. 246 (盛谷 1975) および地調月報 24巻11号 (小野 1973) で紹介されており レストンのナショナル・センターについては 地質ニュースの No. 259 (長谷 1976) と No. 297・298 (盛谷 1979) デンバーの USGS については 地質ニュース No. 158 (倉沢 1967) の報告がある。

第28図

所長の来訪をつける告知文書 (A4版) 当時の所長 Dr. MCKELVEY はメンロの出身で その久々の来所はむしろ里帰りといった感じに近い敬愛の念で迎えられていた 「おヤジが帰ってくる!」